

楊貴妃

禪竹作

ワキ
シテ

方士
楊貴妃

地は
季は

唐土
秋

「我まだ知らぬ東雲の。く。道を何くと尋ねん。

詞

「是は唐玄宗皇帝に仕へ申す方士にて候。さても我君政正しくまします中に。色を重んど艶を専とし給ふにより。容色無双の美人を得たまふ。楊家の娘たるによつて其名を楊貴妃と号す。然れどもさる子細あつて。馬嵬が原にて失ひ申して候。余りに帝歎かせ給ひ。急ぎ魂魄のありかを尋ねて参れとの宣旨に任せ。上碧落下黄泉まで尋ね申せども。

更に魂魄のありかを知らず候。ここにいまだ蓬萊宮に至らず候ふ程に。此度蓬萊宮にと急ぎ候。

道行

「尋ね行く。幻もがなつてにても。く。魂のありかは其処としも。波路を分けて行く舟の。ほのかに見えし島山の。草の仮寐の枕ゆふ。常世の国に着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。蓬萊宮に着きて候。此所にて委しく尋ねばやと存じ候。

ワキ「有りし教に随つて蓬萊宮に来て見れば。宮殿盤々
として更に辺際もなく。莊嚴巍々としてさながら
七宝をちりばめたり。漢宮万里の粧ひ。長生驪山
のありさまも。是には更になぞらふべからず。あ
ら美しの所やな。

詞「又教の如く宮中を見れば。太真殿と額の打たれた
る宮あり。まづ此所に徘徊し。事の由をもうかゝ
はばやと存じ候。

シテサシ「昔は驪山の春の園に。共に詠めし花の色。移れば
変はるならひとて。今は蓬萊の秋の洞に。ひとり
詠むる月影も。濡るゝ顔なる袂かな。あら恋しの
古へやな。

ワキ「唐の天子の勅の使。方士是まで参りたり。玉妃は
内にましますか。

シテ「何唐帝の使とは。何しにこゝに来れるぞと。九華
の帳を押しのかけて。玉の簾をかゝげつゝ。

ワキ 「立ち出で給ふ御姿。

シテ 「雲の鬢づら。

ワキ 「花の顔ばせ。

二人 「寂寞たる御眼の内に。涙を浮べさせ給へば。

地 「梨花一枝。雨を帯びたる粧ひの。く。太液の芙

蓉の紅。未央の柳の緑も。是にはいかで優るべき。

実にや六宮の粉黛の。顔色の無きも理や。く。

ワキ詞 「如何に申し上げ候。さても后宮世にましくし時

だにも。朝政は怠り給ひぬ。況んやかくならせ給

ひて後。唯ひたすらの御歎きに。今は御命も危く

見えさせ給ひて候。然れば宣旨に任せ是まで尋ね

参り。御姿を見奉る事。唯是れ君の御志。浅か

らざりし故と思へば。いよく御痛はしうこそ候

へ。

シテ詞 「実にく汝が申す如く。今はかひなき身の露の。

有るにもあらぬ魂のありかを。是まで尋ね給ふ事。

御情には似たれども。訪ふにつらさのまさり草。
枯々ならば中々の。便の風は恨めしや。又今更の
恋慕の涙。旧里を思ふ魂を消す。

ワキ「さてしも有るべき事ならねば。急ぎ帰りて奏聞せ
ん。さりながら御形見の物を給ひ給へ。

シテ「是こそありし形見よとて。玉の釵とり出で。方
士に与へ給ひければ。

ワキ「いやとよ是は世の中に。たぐひ有るべき物なれば。

いかでか信じ給ふべき。御身と君と人知れず。契
り給ひし言の葉あらば。それをしるしに申すべし。

シテ「実にく是も理なり。思ひぞ出づる我も又。其初
秋の七日の夜。二星に誓ひし言の葉にも。

地「天に在らば願はくは。比翼の鳥と為らん。地に在
らば願はくは。連理の枝と為らんと。誓ひし言を
密に伝へよや。私語なれども。今洩れ初むる涙か
な。

地「されども世の中の。く。流転生死のならひとて。
其身は馬嵬に留まり。魂は仙宮に至りつゝ。比翼
も友を恋ひ。独翹をかたしき。連理の枝朽ちて。
忽ち色を変ずとも。同じ心の行くへならば。終の
逢ふ瀬を。頼むぞと語り給へや。

ロンギワキ「さらばといひて出舟の。伴なひ申し帰るさと。思
はゞうれしさの。猶如何ならん其心。

シテ「我は又。なに中々に三重の帯。廻り逢はんも知ら
ぬ身に。よしさらば暫し待て。有りし夜遊をなす
べし。

地「実にや驪山の宮の内。月の夜遊の羽衣の曲。

シテ「其かざしにて舞ひしとて。

地「又取りかざし。

シテ「さす袖の。

地「そよや霓裳羽衣の曲。そゞろに濡るゝ袂かな。

シテ「何事も夢幻のたはぶれや。

地「あはれ胡蝶の舞ならん。

シテクリ「夫れ過去遠々の昔を思へば。いつを衆生の始めと知らず。

地「未来永々の流転。更に生死の終りもなし。

シテサシ「然るに二十五有の内。何れか生者必滅の理に洩れん。

地「先天上の五衰より。須弥の四州のさまぐに。北州の千年つひに朽ちぬ。

シテ「いはんや老少不定の境。

地「歎きの中の歎きとかや。

クセ「我も其かみは。上界の諸仙たるが。往昔のちなみありて。仮に人界に生れ来て。楊家の深窓に養はれ。いまだ知る人なかりしに。君聞し召されつゝ。急ぎ召し出だし。后宫に定め置き給ひ。偕老同穴のかたらひも。縁尽きぬれば徒に。又此島にたゞ独。帰り来りて澄む水の。あはれはかなき身の露

の。たまさかに逢ひ見たり。静に語れ憂き昔。

シテ「さるにても。思ひ出づれば恨ある。

地「其文月の七日の夜。君とかはせし睦言の。比翼連理の言の葉も。枯々になる私語の。笹の一夜の契りだに。名残は思ふならひなるに。ましてや年月。馴れて程経る世の中に。さらぬ別れのなかりせば。千代も人には添ひてまし。よしそれとても遁れ得ぬ。会者定離ぞと聞く時は。逢ふこそ別れなりけ

れ。

地「羽衣の曲。(序の舞)

シテ「羽衣の曲。稀にぞ返す乙女子が。

地「袖打ち振れる心しるしや。心しるしや。

シテ「恋しき昔の物語。

地「恋しき昔の物語。尽さば月日も移り舞の。しるしの釵又賜はりて。暇申してさらばとて。勅使は都に帰りければ。

シテ「さるにてもく。」

地「君には此世逢ひ見ん事も。蓬が島つ鳥。浮世なれども恋しや昔。はかなや別れの。常世の台に。伏し沈みてぞ留まりける。」

正本・国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著